

脳・肉体意識から超脳・肉体意識へ

齋藤 忠資

① 意識の脳・肉体による制約と解放

私が石だったら、あるいは熟睡した時には、私という意識の世界もない。肉体の五感は物質でできているので、物質しか知覚できない。地球の表面を生きるために脳と肉体の五感が進化した。脳と肉体の五感によって、我々は通常の物質世界像を作り出す。すべての生物が与えられた知覚能力に合わせて、同じ地球上に生きていても、異なる世界のイメージを作り上げている。1) 脳と肉体の五感で捕えられた限りのリアリティーしか我々には分からない。観測器も我々の五感を拡大したものでしかない。人間には観測したことしか分からない。2)

我々が知覚したリアリティーは、脳によって解釈されている。時間と空間は人間が生み出した世界を解釈する上での枠組みである。脳の肉体は物質から作られているので、物質として我々の意識と知覚を制約している。具体的には①時間と空間の隔たりによる制約であり、②電磁力・重力の二つの核力による制約である。我々の感覚を超えたリアリティーそのものは、人間には分からない。勿論人間は、石や植物や他の動物と比べれば、意識と知覚という点で進化している。しかし、人間が自分の意識と知覚を絶対的で完全なものと思うのは間違いである。例えてみるならば、太陽の光は地上のものを見えるようにしてくれるが、同時に太陽の光は広大な宇宙の星々を見えなくしている。太陽が沈むと、夜空には多くの星々が輝く、地球は広大な宇宙の中の一つの星に過ぎないことが分かる（脳フィルター説）。その意味で脳と肉体の五感によって作り出された常識は、地球の表面を生きるのには有効であるが、それを絶対化すると真理の発見の妨害となる。死などによって、脳と肉体を超えないと、真のリアリティーは分からない。脳と肉体の制約を超えると、脳と肉体を超えた意識にシフトし、それまでは分からなかったリアリティーが分かるようになると、臨死体験者は述べている。臨死体験者によると、意識は宇宙全体を包むまでに拡大し（宇宙意識）、万物と一体になり、宇宙全体と万物を知り、理解できるようになる。瞑想は、脳と肉体の制約から意識を解放して、脳と肉体を超えたリアリティーに意識をアクセスさせることである（肉体のエゴなき対象のなき純粹アウエアネス）。

② 非局所的リアリティー内に埋め込まれた脳：脳受信装置・フィルター説

M.モースによれば、宇宙の全情報は脳の外の非局所的リアリティーにあり、人間は脳を通じて非局所的リアリティーの情報にアクセスできる。脳と肉体には意識を発生させる能力はなく、脳と肉体を超えた、時間と空間の隔たりを超えた非局所的情報宇宙内に、脳と肉体が埋め込まれている。肉体の意識は、この非局所的情報で

あり、非局所的リアリティーの情報の一部であって、肉体の個人意識と感覚の重要な部分である。3)

R.ランザによれば、意識と生命は宇宙の根本的リアリティーあって、物質界は意識と生命をサポートするために進化した。そして意識な物質と相互作用するために、脳を用いている。時間と空間は、意識と物質を統合するために、脳が用いている手段である。4)

S. ハメロフは、量子ソウルの特徴として、意識の非局在性を挙げ、
a) 絡み合いが万物を相互に結合させること b) ファンダメンタルな時空幾何学における量子情報として、埋め込まれているプラトンの価値とコンタクトしていること c) 非局在的フラクタル的プログラムに似た時空幾何学におけるパターンとしての意識は、生物学とから独立したより深いレベルに存在できることを指摘している。

5) M. モースは、主として右側頭葉が、非局在的リアリティーと相互作用しているとし、S. ハメロフは、脳内の細胞骨格内のマイクロチューブルが、非局在的リアリティーにアクセスしているとしているが、量子現象は不可分の全体性を特徴としている点を考えると、脳の特定の部位ではなく、脳全体が非局在的リアリティーに関係しているとみるのが正しいと考えられる。6) E. ラズローと J. カリヴァンによれば、意識は肉体の死後も存続する。脳と体は、ホログラフィックなアカーシック場に埋め込まれている。その場に同調すれば、意識はアカーシック場におけるホログラフィックな情報を共有できる。7) 光の完全な全体意識は、量子真空のヴェールによって隠されている。トンネルを通過して自己意識のコアは、振動数を光速にまでアップすることによって、光の世界に到達する

③ 脳・肉体意識から超脳・肉体意識へのシフト

臨死体験者は、局在的脳・肉体意識から非局在的脳・肉体を超えた意識へとシフトする。これは一般的には体外離脱といわれている。脳と肉体は物質であり、時間と空間や4つの力(重力・電磁気力・二つの核力)によって支配されているので、物質を知覚し、物質でできている科学測定器によって測定できる。科学測定器は肉体の五感の延長であり、あくまでも物質と物質内の生命と意識(生命体と人間の身体)が対象である。水平軸の物質が対象であり、垂直軸の主體的体験のクオリアは、対象外である。(D.Chalmers) 夢や幻想は脳内現象である。それに対して脳と肉体を超える意識と知覚は、科学測定器では捕えることができない。「至高の存在は理性によってではなく、心によって知られる。ここにプラトンの幾何学的知性の限界がある。」8) 臨死体験の光の世界は、物質ではなく、純粋な意識の世界であり、意識のクオリアである完全な慈しみ・安らぎ・喜び・美・生きる意味などが見られる。

脳・肉体意識が消滅した後に、脳と肉体を超えた意識にシフトすると、臨死体験者は述べている。この超脳・肉体意識には、物質はなく、時間と空間の制約はなく(非局在性)、4つの力(重力・電磁力・二つに核力)からも解放された純粋の覚醒の

みがある。脳・肉体を超えた意識の知覚は、肉体に知覚とは別のレベルのものであり、肉体時には視覚障害者であっても、超意識では完全な視覚を備えている。

K. リングとS. クーパーによれば、人間の意識は、a) 肉体と脳に基づく通常の知覚を備えた意識と、b) 脳と肉体を超えた意識から構成されていて、通常の肉体意識の時には、脳と肉体を超えた意識は、脳と肉体によって制約されているが(脳フィルター説)、脳と肉体の制約から解放され、超越的意識にシフトする。また超越的意識は、脳と肉体から独立して存在できる。9) 1例挙げると、「耳というより存在そのもので、聖歌のような音楽を聞いた。」10) 肉体は5つの感覚器官に分割されているが、光の存在は、一つの存在全体得知覚する。臨死体験では、肉体時の通常意識と肉体を超えた超意識は異なるレベルのもので、両者を同時に体験することはない。脳と肉体意識が、脳と肉体を超える意識にシフトするとき、自己意識のコアのエネルギーの振動数がアップする。脳と肉体を超えた非局在意識は、物質の制約すなわち時間と空間の制約と、4つの力(重量力・電磁力・二つの核力)による制約から解放されている。非局在意識にはバリアというものはない。非局在意識は、すべての個の意識が切り離すことができない仕方で、全体意識と一つになっている。そこでは主体と客体は分節されるが、分離はしていない。したがって相互に相手に心が読める。空間の隔たりがないので、意図するだけで、どんなに遠い所でも即時に体験できる。(遠隔透視) 空間の隔たりがないので、瞬間移動(テレポーテーション)する訳ではない。

物体の内部も透視できる。肉体の耳では聞こえない遠くの音や声も聞くことができる。通常の肉体では知覚できない宇宙のマイクロレベルとマクロレベルを体験できる。空間(距離)がないので、固定した場所(位置)や大きさや方位(上下左右前後)や形姿や主客二分というものもない。そして肉体という個の壁を越えて、他者の意識と一つになれるので、地上で生きている人々の思いや気持ちが直接分かるようになる。(読心) 死者や光の存在とも言葉と口や耳なしに、思いを直接即時に通じ合うことができる。(テレパシー) また時間の隔たりがないので、未来でも過去でも欲するだけで即時に体験できる。因果関係というものもない。肉体の脳よりも早く鮮明に、また同時に多くのことを思考できるようになる。臨死体験者は、死者と出会うが、これは死者も肉体としては死んでいても、物質を超えた非局在意識として、生きているからに他ならない。物質界では時間が流れるので、人間は老化し死ぬが、非局在意識には時間というものはなく、未来も過去もすべて現在なので、生まれることも死ぬこともなく、すべてのものが今生きている。(永遠の現在) 時間と空間の隔たりがないので、非局在意識は宇宙の全情報を備えているが、肉体に戻ると、その全情報の大半を忘れてしまう。この事は肉体の脳がキャッチできる情報には限りがあることを示している。(脳フィルター説)

非局在意識は、時間と空間の隔たりのない、不可分の全体の状態にあるので、完全

な統合的全体意識となる。人生再検査でも時間と空間の隔たりがなく、すべてのシーンが不可分の全体として瞬時に再現される。典型的な例を引用しよう。

「グライダーが100m以上から地上に落下した瞬間、私は私の身体から抜け出した。私にはもはや身体は必要でなかった。身体は制約であった。私はグライダーのトップまで浮上し、血だらけで骨折し、重傷を負った自分の身体と、大破したグライダーを見た。身体の意識を失っていたが、身体から分離した私の魂は痛みがなく、安らぎと喜びで満ちていた。身体の五感・思考・感情は消えたが、突然自己意識の内なるマインドに目覚めた。身体の五感は、外部の刺激に依存しており、脳がそのシグナルを解釈してイメージなどを作る。しかし魂は宇宙と接続するために、感覚器官を必要とはしない。魂はテレパシーのように機能する。私の視覚と聴覚は、私の変化しているマインドに従う。私は私が考えるものを見そして聞く。それは受動的ではなく、能動的認知プロセスである。魂はエネルギーに似たその基礎的な形を通して事物を理解するので、魂の知覚はもはや物体や距離に制約されていない。私の感情的反応は、外部の状況や周りの世界と接続していないので、私の身体は重傷であるのに、魂の私はとても安らかで、苦痛はない。魂の私は音によってコミュニケーションしない。コミュニケーションは思考を通しての直接のコミュニケーション、つまりテレパシーによって機能する。肉体感覚はコード化とコード解読によって行われるため誤解を生じるが、魂の超感覚コミュニケーションは、意識同士が直接即時的に行うので、誤解は生じない。」(11)

脳・肉体を超えた意識は、物質によって条件づけられていないので、制約のない完全な感覚を備えている。1例だけ挙げると、「私は物質や状況や判断によって条件づけられていない慈しみと制約のない感覚によって、取り囲まれた。」(12) 脳・肉体意識は物質によって条件づけられているので、障害者が存在するが、光の完全意識には障害者は存在しない。脳・肉体をこえた意識には、肉体のような空腹・渇き・疲労・睡眠・呼吸・心拍・病気・苦痛はない。誕生・成長・老化・死のプロセスもない。成長と老化がないので、いつもピーク時の年齢に見える。また肉体のような苦悩・悲しみ・恐れ。不安・心配・偏見・貪欲と言ったネガティブな感情や思いもない。脳・肉体意識から脳・肉体を超えた意識へのシフトは、前者のネガティブな不完全な状態から、完全な状態にレベルアップすることである。その際自己のアイデンティティーは保持される。要するに脳と肉体を超える意識は、脳と肉体の感覚を含めて、脳と肉体によって生み出される意識(エゴ)すべてに依存していない、それとは別の独立した固有の意識状態である。脳と肉体を超える意識は完全であるが、脳と肉体に制約された意識は不完全である。

④ 脳・肉体意識の消失時に、超脳・肉体意識が覚醒

臨死体験の場合には、臨床死や昏睡状態のために、脳・肉体意識が消失していると全く同じ時期に、脳・肉体を超える意識が目覚めている状態になっている。振動

するエネルギーの低い脳・肉体意識レベルから、振動するエネルギーの高い超脳・肉体意識レベルにシフトする。私というアイデンティティは保持されたままである。代表的な例を挙げよう。

「グライダーで100m以上の上空から落下した。身体の五感と意識は消えたが、突然光がスイッチオンし、闇が消え黄金の光に照らされた。私は光から構成され、光の一部になっていた。私は無条件の愛に包まれ、完全で限定されていなかった。私は身体の形を備えていたが、境界はなかった。もはや呼吸することも心拍も必要なかった。私は重力も重さもなく、真空の中を活動した。」 13)

「私が宇宙と一つになった時、私は私の物質のリアリティの全感覚を失った。私は音楽を聴いたが、人間の耳を通してではない。私は人間性と肉体の感覚の全てを失った」 14)

ハーバーと大学の医学校の脳外科医のE. アレグサンダーは、大腸菌による脳髄膜炎が原因で、大脳新皮質が完全に全滅した。彼は昏睡状態の中で、言葉と感情と論理と記憶と私というアイデンティティを失った。人間でも動物でもなく、それ以前・それ以下の地下の闇の世界で、グロテスクな動物の顔が汚物から現れ、金切り声を上げて消え、糞のような臭い、血のような吐いた物のような臭い、生き物の死の臭いがしたという。また彼は自分の肉体とのアイデンティティから完全に自由になり、脳と肉体の限界を離れ、魂が身体を離れると、神と直接コミュニケーションした。大脳新皮質の全壊により、彼は脳の制約から完全に解放された意識のリアリティに出会ったという。彼はマインド・魂・スピリット・パーソナリティは、身体を超えて存在し、スピリットの自己はこの物質を超えているという。さらに肉体と脳の死は、意識の終わりではなく、人間の意識は、脳と肉体の死を超えて存続するという。N. ダニソンは「物質的なものはすべて消える。肉体の感覚もすべてなくなる。苦痛も消える。」 16) 「他者を抱くことはなく、そよ風を顔に感じることもない。頭に降る雨はなく、肌を焼く日差しもなく、暑さも寒さもなく、衣服の擦れる音・呼吸による胸の伸縮・心拍・空腹・渇き・肉体の欲求・味覚もない。」 17)

「自己意識を失うことはない。外から見ると、私の肉体が意識のない昏睡状態に見えても。私自身はより高い振動数レベルの意識の次元へシフトした。意識を失うことはなかった。」 18) この例では、脳・肉体意識から超脳・肉体意識へのシフトは、低い振動数から高い振動数レベルへのシフトであることを示している。

「臨死体験の時、肉体意識はなく、肉体を超えた意識があった。」 19)

「私の両目は閉じていて、私は意識がなかったが、私は病室にいて、病室の全ての人が見えて、同時に別の次元を体験した。」 20)

「一人の看護師が、私は救急治療室に入った直後に気を失ったと医師に告げるのを聞いたけれども、私は完全に意識があつて、集中治療室とそこで起こったことをすべて、詳しくはつきりと気付いていた。」 21)

P. レイノールズは、すべての脳の機能が停止し、脳から血流がなくなるという脳死に近い状態の時に、脳と肉体を超える意識を体験している。22) 同様に脳死に近い状態で脳手術をした女性が、脳・肉体を超える意識を体験した事例を、脳外科医のA. ハミルトンが報告している。23)

「ある女性が重い心筋梗塞になり、二日間昏睡状態になったが、その間に美しい花園で、光の存在と出会った。」24)

「ある医者が長距離走をして、肉体は意識を失ったが、そのとき彼は鮮明な意識を体験した。」25)

「ある子供が臨死体験をし、肉体が意識を失った状態の時に、死んだ祖父母が現れ、その子を励ました。」26)

「私は意識を失うと、突然通常以上の覚醒した意識に目覚めた。肉体の制約や悩みから解放された。私のアイデンティティは保持されていた。私はこの上ない安らぎの中にあっただ。」27)

超脳・肉体意識から自分の肉体に再び戻る時も、鮮明な非局所意識は完全に消滅し、再び元の意識を失った状態や意識が朦朧とした状態や悪夢を見ている状態に戻る。典型的な例を引用しよう。

「肉体に戻ると、臨死体験の生き生きとしたスーパーリアリティーを完全に失った。時間と空間の制約、言葉による制約、線型の思考に再び戻った。妻と医者達が私を殺そうとしている。南フロリダの癌病院の戸外のエスカレーターに、私は妻と南フロリダの二人の警官とケーブルの滑車上のアジアの忍者と写真家によって追跡されている (ICU 精神異常)。」28)

「ガイドが消えるとすべては暗闇になり、意識を失って車の事故から二日後に、ようやく目を覚ました。」29)

「光の人物から戻らなければならないという声があった。その時、私の意識は消えて自分の肉体に戻ったが、肉体は意識がない状態であった。」30)

「自分の肉体に戻ると意識を失い、何も記憶もない。脳は麻酔をかけられていて、意識はなかった。」31)

「光のもれる霧を通して、再び自分の肉体に戻ると、私は意識を失った状態になった。」32)

「光の世界から私は手術室の医師達を見下ろす。手術台の上に、私の体が横たわっている。突然すべてが真っ暗になり、私は自分の肉体に再び戻った。」33)

特殊な例として、薬を飲んで幻覚状態中に、脳・肉体を超える非局所意識にシフトし、上から自分の肉体が幻覚状態にあるのが分かると同時に、超意識自身は完全にはっきりと知覚し、思考していて幻覚から完全に解放されているのが分かったというケースがある。34)

「自分の肉体に戻る：二日間は殆ど昏睡状態。」35)

⑤ 超脳・肉体意識：意識・知覚の拡大と高い振動数レベル

通常の脳・肉体意識から超脳・肉体意識へとシフトすると、意識はより高い振動数レベルにシフトするため、意識は拡大し、知覚もアップするので、地上の生きた人間には、臨死体験者の超脳・肉体意識は見え、聞こえないが、臨死体験者の超脳・肉体意識からは、地上の生きた人間が見え、言うことも聞こえる。このことは、振動数をアップして自己意識が脳・肉体意識の制約を超えていて、4次元時空から5次元時空にシフトすることを意味する。(36)

典型的な例を挙げよう。

「他人に出会っても相手に自分の姿は見えない。また、相手に触ることもない。相手と同じ次元の存在である場合に限り、自分のことが相手に見え、相手に触れると相手の肉感を感じられる。」(37)

「溺れた時、私を助けようとしている人には、私の言うことは聞こえない。彼らの言うことは聞こえる。思いも分かり、もうだめだと思ったのが分かる。」(38)

超脳・肉体意識は知覚が完全なので、知覚の障害者はいない。知覚の障害者は、肉体の五感の問題である。肉体上の知覚障害者も完全な知覚を備えている。先天性全盲者も完全に見えるようになるが、肉体に戻ると再び全く見えない状態になり、肉眼の視覚が治癒されるわけではない。強度の近視者や弱視者も完全に見える状態になる。先天性聴覚障害者も、完全に聞こえるようになる。超脳・肉体意識は、完全な知覚を備えているが、肉体の五感が知覚するのは物質の世界に限定されており、超脳・肉体意識は知覚する超物質界は知覚できず、肉体の五感には障害者もいる。超脳・肉体意識は、全く物質のない純粹意識の慈しみの光の完全な調和（コヒーレンス）の状態にあるが、肉体意識は調和が乱れた（デコヒーレンス）状態の物質の世界にある。

肉体意識が超肉体意識にシフトした直後は、非局所意識は物質界を超えているので、物体は妨害にならないし、時間と空間の隔たりを超え、重力・電磁力・二つの核力を超えているが、臨死体験者の関心が地上に向けられているので、地上の状況を知覚する。ここで物質界を超えて、外から知覚しているという点が重要である。宇宙空間の星々を通過する。自分の肉体にも直接関心がなく、第三者の視覚から見る。従って肉体の苦痛からも解放されている。

代表的な例を挙げよう。

「医師達が蘇生している自分の体を、停観者のように上から見る。自分の肉体を自分とは関係のないものとして見る。」(39)

「体外離脱して上から手術の様子を見る。私の死んだ体を見ても、何の関心もない。」(40)

「自動車事故で体外離脱して、上から事故の様子を見た。大破した車の後部座席に、私の体が負傷して横たわっているのを、私は何の感情もなく、観客者として見ていた。」(41)

自分とは肉体がなくなり、全く気にならなくなるのは自分の肉体だけではなく、物質界のすべての事が、自分とは関係がなくなる。

典型的な例を引用しよう。

「心停止し血圧がなくなる。体外離脱すると、自分の肉体や出産したばかりの息子のことも気にならなくなる。」 4 2)

「体外離脱し、体はなくなり自分の名前や子供達や夫のことも仕事のことも気にならなくなる。」 4 3)

「体外離脱後、魂は物質界のことは全く関心がなくなり、肉体の欲望から解放された。」 4 4)

「体外離脱して、私は物質的・肉体的には無になり、物質界に対しては全くの観察者になった。」 4 5)

「体外離脱して、全くの感情なしに上から手術室の人々を見た。まるで完全に分離していたかのように。」 4 6)

電磁作用からも解放されているので、地上の物体とは電磁作用をしないため、すべての物体（壁でも建物でも）を素通りできる。地上の生きた人間や物体（例えばドア、電話の受話器やスイッチ等）にもタッチできない。地上の生者には臨死体験者の超意識は、肉体の五感を超えているため、声も聞こえないが、臨死体験者の超意識からは、地上の生者が見え話す声も聞こえる。肉体と物質を超えると時間と空間の制約がないので、どこでも、いかなる時間でも思いを向ければ直ちに体験・知覚できる。（時間の隔たりなし：未来と過去を体験、因果関係なし。空間の隔たりなし：遠隔透視・内部透視、どの場所でも欲すれば瞬時移動なしの体験できる。）固定した場所・大きさ・方位というものがないので、360度完全視覚や完全聴覚が可能となる。主体・客体の二分もなくなる。

脳・肉体を超えた超意識は、もはや物質界とは関係がなくなる。「プールで溺れた時、私はもはや呼吸する必要はなかった。水と空気は私には関係していなかった。」 4 7) 物質界を超えた体には、物質エネルギーは必要はなく、食べ物も水も取らず、空気の呼吸もしないと言われている。

「私は肉体という牢獄から解放された。私を結びつけていたすべての重荷、呼吸と身体の動きや、家族・友人・知人等による束縛等から解放され、万物と一体になった。」 4 8)

「物質界と肉体の全ての痛みやフラストレーションや気掛かりや重荷から私は解放された。私は完全に自由で光速で移動できた。物理的運動の感覚はなく、3次元空間の運動ではなく、まるで身体よりむしろ思考によって進んだ。純粹な意志があった。物質界から完全に自由になった。私は物質や状況や判断によって条件づけられていない慈しみと制限のない感覚によって取り囲まれた。地上の私の肉体の苦痛に満ち、弱体している有限性から引き揚げられたように感じた。」 4 9) この例は、肉体(物質)か

ら解放された純粹意識は、光速になり、物質の4次元時空を超えた状態になることを示している。また光の完全意識の慈愛は、物質界の状況や判断によって、条件づけられていないので、無条件の慈しみと制限のない完全な感覚となることを示している。物質と肉体の制約ということは、a)時間と空間による制約 誕生・成長・老化・死という時間による制約 b) 重力・電磁力・二つの核力による制約 c)食物と水と空気などをエネルギー源としているという物質による制約 d) 病気になったり、障害者になるという物質による制約 e) 人間関係による肉体的束縛 f) 肉体という個(エゴ)のバリア g) 量子の確率の波による制約ということであり、これらの制約から解放されるということになる。従って脳・肉体・物質から解放された非局在意識は完全に自由になる。典型的な例を2例だけ挙げると、「私は光の中で、完全に自由になった。」50)「肉体の五感による知覚が苦しみのもとである。それを通して物質界をリアルと認識する。我々は肉体に閉じ込められている。肉体から解放されて、善悪から解放されて初めて安らぎを体験する。」51)

完全な自由は、光の完全な純粹意識の世界のみにある。肉体(物質)の世界には、完全な自由はなく、選択の自由のみがある。文字と文法は変えられないが、それを用いて色々な表現ができる。ゲームやスポーツのルールは変えられないが、勝敗を競うことができる。

⑥ 超脳・肉体意識は他者の心が完全に分かるようになる

脳・肉体を超える意識になると、他者の心と一つになるので、臨死体験者は、自分が関心を向けた地上の生者の心が完全に分かるようになる。代表的な例を挙げよう。「私は医師と看護師を見た。彼らには私が見えなかった。私の知覚は拡大した。私には病院で見た人々のことが完全に分かった。彼らの喜び・悲しみ・愛と憎しみ・苦痛・秘密のことなどすべてが分かった。彼らの感情が分かった。その理由も分かった。即座に彼らのことが、自分のことの様に分かった。彼らの心が分かった。私は人間に対して愛を持った。ロマンチックな愛ではなく、完全な共感の愛である。私の気持ちは地上にいた時よりも、はるかに深いものだった。病院であった人々のコアは、私のコアと結合していた。以前にあったことのない人々だが、それは無条件の慈愛であり、すべての人が兄弟姉妹だった。彼らは私だった。我々は巨大なパズルの中の結合したピースとして、一つであった。」52) この例では、すべての人間のコアは、無条件の慈愛によって結合し、一体性をなして、すべての人は私自身であると言われている。

「心臓の手術をした時、私の意識は私の肉体の外にあり、医師の気持ちをじかに感じる事ができた。私の視点は拡大し、他者の気持ちを直接完全に感じる事ができた。」53)

「自動車事故で体外離脱した。友人が救急車を呼び、彼は息をしていないと、心の中で思っているのが分かった。ほかの人の心の思いも分かった。」54)

「私は他者の思いを見ることができた。」 55)

「ある医師が病院に向かう途中で、車の事故を起こした。彼はそのあと心停止の患者の蘇生を行った。翌日その患者は蘇生の間、体外離脱をし、その時の状況を正確に言い当てた。その患者は、“先生は事故のことを心配していましたね。私にはわかりましたよ。”と言った。」 56)

R. パサローは臨死体験した時、肉体は意識を失っていたが、地上で生きている周りの人達の思いは、すべてわかったという。

57)

⑦ 超脳・肉体意識は万物と一体になる

臨死体験者の意識は、脳・肉体を超えた自己のコアになる。脳・肉体を超えた自己のコアは万物と一体になる。典型的な例を引用しよう。

「私はハイヤーセルフ・限りなきセルフ・魂・スピリットになった。私は私の身体ではない。私はすべてのものと一つになった。私は純粹意識である。外部のものと自分を同一視することによって、分離と言う幻想が生まれる。肉体を超えると真の自己は皆結合している。純粹意識の状態では我々は皆一つ。シンクロニシティと ESP は我々万物と一体になった結果である。私は私の身体でも人種でも宗教でもない。真の私は限定がなく、完全で全体的な存在で、何者によっても破壊されることはない。」

この例では、シンクロニシティや ESP は、万物一体となった結果生じる現象であると言われている。 58)

「臨死体験をした時、自分の肉体から私の意識を超えて、科学的な方法ではなく、空気分子と私を形成しているもの(本質)とが結合したのに気付く。このマインドの枠内で、私は常に万物と結合している。私の覚醒において、私はこの一部の存在となった。莫大な量の知識が時間の外の瞬間にある。宇宙と命の仕組みの知識がある。私のマインドは宇宙と溶け合った。私は天井を通過して浮上した時、原子を見た。個体としてではなく、見ることを超えて原子を感じることができた。私は過去と未来の万物を知った。万物は私の一部であり、私は万物の一部である。万物は結合している。」 59)

この例では、宇宙と命の仕組みに関する情報が時間の外の瞬間にあり、脳・肉体を超えた意識は、時間の外の瞬間になり時間というバリアを超えて、宇宙についての全知識を獲得できると言われている。

「体外離脱中、私は遍在、万物と一体、私は万物だった。」 60)

このことを逆に言うと、脳・肉体意識には、万物は一体であることは隠されている。つまり、脳と肉体が、万物は分離しているという幻想を生むということになる。脳と肉体が時間と空間というバリア(境界)を生むのである。

好例を引用しよう。

「肉体は万物と結合している我々の意識から分離と言う幻想を生む。」 61)

「私は、すべてだった。すべては私であった。地上の外観以外の本質的違いはない。」
62)

全体として超脳・肉体の非局在意識が、完全な意識・知覚・思考・感情・情報・理解・コミュニケーション等を備えていると見られる。これと比べれば、脳・肉体の局在意識知覚・思考・感情・理解・コミュニケーション能力は、不完全でレベルが低い（時間・空間による制約等のために）。光の完全意識・知覚等が、物質界で生きるために脳・肉体という形で、レベルダウンした仕方で物質化したものと考えられる。肉体意識・知覚は、光の完全意識が投射されたものである。

[註]

- 1) J.ユスキュル、生物から見た世界、新思索社、1997
- 2) J.A.Wheeler
- 3) <http://spiritualscientific.com/a> new scientific paradigm of consciousness and the brain
- 4) A New Theory of the Universe,American Scholar,2001
- 5) The Quantum Soul:A Scientific Hypothesis,in A Moreia-Almeida & F.S.Santos(eds.) Exploring Frontiers of the Mind-Brain Relationship,Springler Science+Business Media,LLS,2012,91
- 6) M.Beauregard,Spiritual Brai,Harper One,2007
- 7) Cosmos,講談社、2008,216
- 8) K.Kahwohl,Transcendentalism,Writers Clubs Press,2002
- 9) Mindsight,William James Center for Consciousness Studies,1999,182~186
- 10) E.アレグサンダー、プルーフ オブ ヘヴン、早川社店、2013,168
- 11) www.nderf.org/nderf/nde.Experiences/bell.c.nde.htm
- 12) www.nderf.org/bryan-z's-nde.htm
- 13) www.nderf.org/nderf/nde.Experiences/bell.c.nde.htm
- 14) www.nderf.org/cara-m's-nde.htm
- 15) プルーフ
- 16) Backwards,APLee & Co.,2007,231
- 17) Backwards,232
- 18) www.towardthelight.org/multidimensionalstudies/thedyingprocess-html
- 19) www.nderf.org/alejandra-m-nde.htm
- 20) www.nderf.org/anita-m's-nde.htm
- 21) www.nderf.org/mary-nde.htm
- 22) M.セイボム、続あの世からの帰還、日本教文社、2005,41~62

- 23) The Scalpel and the Soul,Penguin Books,2008,188~204
- 24) J.Michels,Berichte von der Jenseitsschwelle,Goldmann Arkana,2008,202
- 25) J.Michels,Berichte,165
- 26) J.Michels,Berichte,181
- 27) R.Kruger,A Higher Good,Publish American ,2005,20~22
- 28) E.Alexander,Proof of Heaven,117~118
- 29) J.Michels,Berichte,192
- 30) www.origenes.de/nte/katzman/htm
- 31) J.Michels,Berichte,24
- 32) J.Michels,Berichte,64
- 33) C.H.Hanta,Pathway to the Spirit World,First American Publishing,1995,113
- 34) B.Greyson,Seeing dead people not known to have died,Anthropology and Humanism,vol.35,no2,160~161
- 35) D.ブリンクリー、光の秘密、ナチュラルスピリット、2013,31
- 36) 拙論、4次元空間と臨死体験、人間文化研究、2000,1~22;五次元界モデルと超意識体、人体科学、14-1,2005,41~49
- 37) 坂本政道、死後体験、ハート出版社、平成16年、32
- 38) www.nderf.org/robert-c-nde.htm.
- 39) J.Michels,Berichte,21
- 40) www.nderf.org/tom-n-nde.htm
- 41) www.nderf.org/rena-p's-nde.htm
- 42) www.nderf.org/mary-m-nde.nde
- 43) www.nderf.org/carol-l-nde.htm
- 44) 飯田史彦、ツインソウル、PHP 研究所、2006,68~70
- 45) www.nderf.org/cheryl-n-nde.htm
- 46) www.iands.org/nde-archives/experiencer-accounts/knowing/purity.htm
- 47) www.nderf.org/debbie-nde.htm
- 48) www.nderf.org/augustin's-nde.htm
- 49) www.nderf.org/bryan-z's-nde.htm
- 50) www.nderf.org/kristin-d's-nde.htm
- 51) R.Kruger,Good,,22
- 52) J.Olsen,I Knew Their Hearts,Plain Sihgt Publishing,2012,35~37
- 53) www.nderf.org/john-z-nde.htm
- 54) www.nderf.org/richard-l's-nde.htm
- 55) www.nderf.org/NDERF/NDE Experiences/garry-r-nde.htm
- 56) R.ムーディ、光の彼方に、TBS ブリタニカ、1990,199

- 57) R.アルメダー。死後の生命、TBSブリタニカ。1992,113~118
- 58) A.Moorjani,Dying to Be Me,Hay House,2012,144~145
- 59) www.nderf.org/marke-j's-nde.htm
- 60) [www.nderf.org/NDERF/NDE Experiences/robyn_nde.htm](http://www.nderf.org/NDERF/NDE_Experiences/robyn_nde.htm)
- 61) www.nderf.org/marta-g-nde.htm
- 62) J.Long,Evidence of the Afterlife,Harper Collins,2010,158